

もっと高いところへ 防災集団移転をいち早く決定

宮城・南三陸 歌津地区

高台移転 住民主導で



1693年の発足とされる契約会は現在、歌津・伊里前地区の77戸で構成する。うち74戸が津波で山林や田畠、津波被害を免れた同中より標高が高い。海岸から車で5~10分と近く、漁師がこれまで通り漁業を続けることも可能だ。

うつりにつなげたい考えだ。集落ぐるみで建設

共有地は歌津中の北側に広がる山林や田畠。津波被害を免れた同中より標高が高い。海岸から車で5~10分と近く、漁師がこれまで通り漁業を続けることも可能だ。

互助組織が共有地供出

伊里前契約会のメンバー15日、宮城県南三陸町の歌津中
(大原大介)

1693年の発足とされる契約会は現在、歌津・伊里前地区の77戸で構成する。うち74戸が津波で山林や田畠、津波被害を免れた同中より標高が高い。海岸から車で5~10分と近く、漁師がこれまで通り漁業を続けることも可能だ。

前例ない支援期待

歌津・伊里前地区は会員以外も含めて約420世帯。大半が被災しており、会は地区全体の世帯を

海辺の自宅を津波で失った人が多いことから、新たなままで一緒に移り住むことを提案する。

13

新たなままで受け入れることも視野に入れる。歌津・伊里前地区は多額の費用が見込まれる造成費の調達。高低差があるため、ライフライン整備も大きなため、ライフライン整備も難航が予想される。

会は共有地を無償で供出する代わりに、国などに造成費の工面を求める方針で、既に県や町にも考え方を伝えた。

佐藤仁町長は「前例のない災害には、前例のない対応が必要だ」と意気込む。契約会は冠婚葬祭の相互協力や共有地の管理運営が主な事業。つては雑木を燃料にしたり、木材を共同で販売するなどしていた。

▲2011(平成23)年5月9日河北新報。

記事提供 河北新報社

安心して暮らすために集落全体を高台に移転したいと、歌津地区伊里前の人々が動き出した。

瓦礫と化した町の惨状に向き合いながら、住民たちは生活の再建について話し合いを始めた。再び津波が来るかもしれない場所に家を再建することはできないのではないか。いち早く声を上げたのは、歌津地区の伊里前契約会だ。自ら土地を供出することを前提に、高台への集団移転の実現をいち早く町に要望した。

佐藤仁町長も伊里前の住民たちと同様に、すべての住民が枕を高くして寝られる高台に移転する必要性を強く感じていた。しかし、そのためにかかる費用は、町だけではとても負担できるものではなく、佐藤仁町長は国の協力を強く要望した。住民たちの命を守るために、高台移転しかない。強い思いだった。

2011(平成23)年7月には高台への防災集団移転を念頭に震災復興町民会議を開催し、住民たちの意見の集約を急いだ。

当初、国の復興基本方針では原状復帰を原則としていたが、南三陸町からの要望などを受けて、「高台移転」が検討され、同年12月には基本方針に盛り込まれた。

この方針が決定する前から、南三陸町は高台に新たな町を再建しようといち早く決定し、住宅用地の取得など多くの課題が山積する中、全国からの派遣職員の協力も得ながら高台移転事業を進め始めた。